

北庭

宸殿の北側にある庭園は、落ち着いた気持ちを高めることを目的としており、湧き水が流れ込む、心の文字の形をした池、滝、青々とした木々に覆われた人工の丘などの要素で実現されています。丘の上にある茶室、飛濤亭は、そこにたどり着くまでに滝の水しぶきがかかってしまうことにちなんで、そのように名付けられました。

この庭園は 1600 年代後半に遡ると考えられていますが、1887 年の火災でほぼ完全に焼失してしまいました。1914 年に、七代目小川治兵衛（1860～1933）の監修のもと、周囲の構造物を考慮した上で様々な地勢を配置し、現在の姿に再建されました。特に宸殿から庭を見るとそのことがよくわかります。ここからは、飛濤亭が庭の外にある中門や五重塔へと、だんだんと背が高くなる建物と並んでいる様子を観ることができます。中門や五重塔はもともと鮮やかな朱色に塗られており、今でもその印象的な景観に寄与しています。